

半濁音名義考

岡島昭浩

奥村三雄先生は『国語学辞典』（東京堂 1955.8.20）の「半濁音」の項において、

パ行子音が無声子音であるところから、上田萬年以後、パ行半濁音否定説が行われているが、日本語の性格からすれば、パ行を半濁音と称するのは不合理ではない。

と書かれた。ところがその後も「半濁音という名称は不当」と記す書は多い。例えば日本音声学会『音声学大事典』（三修社 1976.6.15）などは、

半濁音 この名称はもともと文字観であって音声観ではない。つまり清音の文字形「ハ」に対して濁音「バ」という文字形が出来、次でその濁音符号を半分に変えるに当って、前者を全濁とし、後者を半濁と呼んだものである。従って視覚に訴えない限り、「全」も「半」も無意義である。（中略）明らかに後世の誤謬で、正に消滅させてしかるべき用語である。

としている。上田萬年 [1898] の、

中古以降、音韻の学衰ふると共に、音を音として研究せず、文字の上よりのみ音を論ずる似而非学者出で来りて、終に半濁音などといふ名称までを作り、大に世人を惑はすにいたりたり。

を、そのまま踏襲しているのである。

奥村先生はその後、『国語学大辞典』の「清濁」の項において、

その由來 もとは促音や撥音の直後のハ行子音がp音化したものや、表記法 半濁音は濁点の半分に当たる 等からすれば、これをハ行に対する半濁音と称するのも、一面の真理が存する。

と書かれたが、パ行音を「半濁音と称するのは不合理ではない」ことの理由は、更に付け加えることが出来るように思う。奥村先生のお考えを歪めて解釈しているのではないかと恐れるが、「半濁」を論じる際に、「清濁」をどのような視点から見ればべきか、ということは示しておきたいと思う。そのため、まず「半濁」という用語の使われ方を検証したい。

1 韻学用語としての「半濁」

「半濁」という用語については、主に半濁点の考察の中で、沼本克明 [1990]、同 [1991]、菊沢季生 [1935]、深井一郎 [1972]、川本栄一郎 [1990] などが考証している。また、鈴木真喜男 [1975] でも触れるところがある。特に川本 [1990] は多くの用例を集めて詳しいものであるが、これに菊沢 [1935] と深井 [1972] の挙げる用例を合わせれば、「半濁」という術語（また「清と濁の間」など）の江戸期以降明治に至る多数の用例を見ることが出来る。

川本 [1990] が纏めるように、「半濁」の指すものは、現在と同じパ行音の他に、八行転呼音、ガ行鼻濁音、ラ行音、などさまざまである。

この「半濁」という用語中の「濁」、また「清濁」という用語が、中国音韻学からのものであることは言うまでもない。しかし、深井 [1972] にもあるように、「半濁」という用語は中国音韻学にはない、という認識が一般的なようである。しかし実際には中国音韻学でも「半濁」という用語は使用されることがある。

韻鏡に言う「清濁」音が「次濁」とも称される（『古今韻会挙要』など）ことはよく知られているが、元代の劉鑑『経史正音切韻指南』では「半清半濁」となっている（韻鏡の「清・次清・濁・清濁」が「純清・次清・全濁・半清半濁」¹）。また「半清半濁」ではなく単に「半濁」としたものは、『音韻日月燈』（明・崇禎六 1633 年）があるが、この「半濁」は清濁音ではなく、全濁音を指している（「純清・次清・半濁・全濁」）。『音韻日月燈』の影響下にあると思われる竹下朋繩『音韻指掌図』（貞享三 1686 年）では、用語は「半濁」と『音韻日月燈』にならっているものの、指すところは『切韻指南』の「半清半濁」である²。

「半清半濁」は、靈苗天産『声音対』（享保五 1720 年）文雄『磨光韻鏡』（安永二 1773 年）にもみえる。文雄『韻鏡指要録』（安永二 1773 年）には、

清濁音とは次濁音とも云。全濁音に相次ぐ所の濁なればなり。亦半清半濁音とも云。清濁中間の音なればなり。又不清不濁音とも云。清にも偏らず濁にも偏らぬ音なればなり。

と説明している。下って太田全斎『音図口義』（文政六 1823 年か）では、

倭半濁 半濁と云は、韻鏡にて清濁音の事を一名半濁と云、此半濁は唇舌牙喉齒舌にあり。然るに今世上パピブペポの音に小圈を加えて呼ぶ者を半濁と言ふ。此は倭半濁と言ふべし。韻鏡の半濁と分かつべきが為なり。

と、パ行音の半濁と区別すべきであると説いている³。

¹ 『四声等子』の「七音綱目」では「半清半濁」は邪母・禪母を呼び、清濁音は「不清不濁」

² 岡島（予定）参照

³ 『日本文学大辞典』の「閉合」（橋本進吉）で、「これに二種ある」として「韻鏡の閉合」と「国語の音声における閉合」を区別して述べているが、「半濁音」についてもそのように記述することが望まれるものである。

この韻学用語の「半濁」が直接、バ行音を「半濁」と呼ぶことに関わっていたということではできないが、「中濁」などではなく、「半濁」が選ばれたことには、韻学用語の「半濁」の存在があったことは考えられるであろう。

なお、このように『韻鏡』の「清濁」を「半濁」と呼ぶことを、日本語音にあてはめる人も居た。例えば藤井常枝『和漢字名録』(天明六 1786 年)巻の下「字音軽重清濁解」に、

先づ唇音のハヒフヘホを全清全濁半清と分け、マミムメモを半濁とす。(中略)マミムメモは濁音に似て鼻に係こと微なり。清音に似て而も清からず。是を以て半濁音と名くるなり。

とあり、鳥海松亭『音韻啓蒙』(文化十三 1816 年)では、

マミムメモの五音は、ハヒフヘホの半濁也、是れぞ正しき、半濁と云ふべき者なる、

とある。⁴

さらに、泰山蔚『音韻断』(寛政十 1799 年)では、

軽唇音のウはフの半濁なり。牙音に出るものはクの半濁なり。喉音に出るものはユの半濁なり。国字別なきを以て一音の如く思へども其全清全濁は叀別なり。舌上音のチツは舌腹にて呼ものにてタテトの音の舌頭に触て出と異なりこの音又一種歯に触て出るあり。これを別てばツは歯のさきに触れチは歯の根に触て出づ。……舌上音のニヌはチツの半濁なり。半歯音に出るものは歯音シスの半濁なり。……牙音のアイウエオはカキクケコの半濁なり。喉音に出るものはヤイユエヨの半濁なり。国字別なきを以て混ずべからず。(上)

と、日本語音にはない音を説明しようとした。

2 八行転呼音

天明のころ(1781-1789)に本居宣長と上田秋成との間でかわされた論争(宣長が『呵刈葎』に纏めている)では、宣長がバ行音を半濁と呼ぶのに対して、秋成は八行転呼音を半濁と呼んでいる。秋成は『靈語通』(寛政九 1797 年)

⁴これはナ行マ行などを「清濁」音と呼んできたことに通じる。韻鏡の清濁三十六字母図の清濁音の箇所に呉音や唐音の仮名としてナ行マ行を記すことはよくあるが、たとえば、池田柳絮『韻学口訣』(宝暦十一 1761 年)には、

唇音にて云ふときは、ホウと清で読むを全清とす。ボウといふが次清。ボウと濁るは全濁。モウと云うが清濁なり。如斯は四音分るなり。舌音にては全清次清ともに、トウと清むなり。全濁はドウ、清濁はノウなり。

とある。

で、「或説」として、宣長の「半濁は朦朧不正」を引いているが、やはり八行転呼音であると捉えているようである。

八行転呼音を半濁と称するのは、真淵の『続万葉論』などにも見えるが、これは前掲『音韻断』の「軽唇音のウはフの半濁なり」との類似を感じる。『音韻断』のいうところは、軽唇音を唐音で読むと、清音・次清音・濁音である非敷奉母は八行になるが、「半濁」である微母はワ行となることによるのであろう。

ただし秋成は、『靈語通』で、

通俗に半濁音と云り。是は八ヒフヘホのワイウエヲにかよふ也。
……西土の全清次清全濁次濁の格にもあらず。

と、中国のものとは違うとしている。しかし『呵刈葭』上第六条で秋成が八行転呼音を半濁と呼んだことに対する宣長の答えに、

ワヰウエヲは十行中の一行なれば、清音にして半濁といふべきいはれなし、然るを外国にては是を半濁とすることあるによりて(中略) 皇国にては此音を半濁とはいひがたし。

とあるように、宣長は、八行転呼音を半濁と称するのは、中国音韻学の影響であると考えていたようである。

また、富士谷成章『稿本あゆひ抄』でも、八行転呼音を「半濁」と称しているのであるが、『北辺随筆』(文政二 1819 年) 初編三「音の存亡」によれば、

御杖云、八ヒフヘホを、ワヰウエヲの如くいふは、いはゆる清濁音也。

とあり、「清濁音」という言い方からすると、御杖はこれを韻学の方からとらえていたと思われる。

なお、伊藤多羅『音韻新書』(文化元 1804 年) では、八行転呼音を半濁音と称すること⁵と、パ行音を半濁と称すること(「唐体の半濁」とを両方とも否定する。

3 ガ行

ガ行鼻濁音も「半濁」と呼ばれることがある。代表的なものとして文部省発行の『単語篇』明治5年をあげることが出来るが、明治期には多く見られるものである。

川本 [1990] は、三浦命助が『獄中記』で、ガ行鼻濁音を表すのに、パ行音と同様の圈点を用いたことについて考証しているが、それ以前にガ行鼻濁音

⁵ 河・家・杵・顔・縫などの類ひ、古へはしかとカハ・イへと呼たること証多し。然るを中古より音便にカワ・イエと呼来れるを、世に八行の半濁と称は可からず。半濁と云事はなき事なり。只八行をワ行に呼かへたる者なり。

を「半濁」と呼んだり、圈点を用いてあらわしたりしたものは示しておられない。山田忠雄 [1981]p373、鈴木真喜男 [1975]、惣郷正明 [1983] などでもガ行鼻濁音の表記について考証しているが、明治以降のものである。

しかし、これを字音と関連させて考えると、ガ行鼻濁音は鼻音であり、韻鏡にいう清濁音すなわち「半濁」にあたる音であることは明らかであり、江戸時代の韻学に遡る可能性を持つものである。この牙音の「清濁」をはっきりと日本語のガ行鼻濁音と関連づけて説いた江戸時代の資料はまだ見出せないが、次のような鳥海松亭『音韻啓蒙』の記述は、それに近いものであろう。

五十音を合成し、是れが全備を為んには、「ン」音、又「ハヒフヘホ」の清音【パピフペポなり】、「カキクケコ」の半濁音を、合はすれば、人倫言語のこと、一切缺ること無し。

江戸期の韻学の発展には当時の中国音、つまり唐音の存在が寄与したのだが、当時の中国音においては牙音の清濁音は多く軟口蓋音鼻音ではなくなり、ゼ口声母などになっていた。このことが、日本語のガ行鼻濁音を「半濁」と呼んだ資料がなかなか見出せないことの原因の一つではないか、とも思う。例えば、

牙音のアイウエオはカキクケコの半濁なり。(泰山蔚『音韻断』)

牙音の清濁音は、呉音も漢音と同く、ガギグゲゴの全濁を用ひ、華音はアイウエヲを用ひたり。(三浦道斎『韻学筌蹄』)

などとしているのである。

ただ、肥爪周二 [1997a] によれば、悉曇学者の行智が、鼻濁音を「清音よりは重く濁音よりは軽く」とし、「非清非濁」「清濁兼音」として、字音の疑母に近い、としているのも、ガ行鼻濁音を「半濁」と称することに非常に近い。肥爪周二 [1997b] によれば、行智は疑母が「今唐音」でヤイユエヨに近く発音されるのが後世の転訛であることに気づいていたということである。

さて、川本 [1990] に見えるように、ガ行鼻濁音を「半濁」と記す資料は明治以降に比較的多く見える。文部省の『単語篇』が影響を与えたものかと考えられるが、文部省の教科書に定着しなかったことについて、佐藤寛 [1903] には、

文部省にて半濁音の事にて評議ありし時、大坂以西には、カキクケコの半濁は無しとて、之を省きてハヒフヘホをとゞめて、小学読本にも半濁として、ハヒフヘホばかりを出されしが、よく考ふれば、物には必ず対あるものなれば、半濁音ばかり対なしとも言ひ難ければ省きしは誤なり、

と記していて⁶、明治期に議論のあったことが知られる。例えば、落合直文・小中村義象『中等教育日本文典』は、川本 [1990] もガ行鼻濁音を半濁音とし

⁶ この後、「是は維新前に、一弦琴を指南する、大坂生の山中春水といふ人來りて、我小女も、

た資料としてあげているが、この書は版によって半濁音の説明が異なる。見ることの出来た二種の本によれば、明治 24.4.23 発行の 3 版 (福井大学蔵) では、カ行サ行ハ行について半濁を説いているが、明治 26.12.24 発行の 13 版 (岡島蔵) では、パ行を挙げた後に、「右の外に、加行の如きは、音声の上にて、半濁音に呼ぶことあり」とするのみである。

もちろん、この後、ガ行鼻濁音を「半濁」と称することが途絶えてしまったわけではない。同じく落合直文の『日本大文典』明治 27.7.10 では、

加行にも、半濁音ありといふ説あり、そは、かのはぎ (萩) ふぐ (河豚) かご (籃) たが (籜) かげ (影) などの、次濁音のことをいふなり。

と書いている。「次濁音」とあることから、ここではまさに韻鏡の清濁音としての「半濁」であることを意識しているのである。更に、

他の佐行多行波行にも、この次濁音といふものありて、語の中下にあるときは、おほかた、さるよび声となるなり。されば、こゝにひとり加行のみ次濁音ありとて、あげつらふは、深くその発音を極めざるものなり。

とあるが、これは、落合直文が、ガ行以外の濁音にも鼻音要素を持つ、陸前の出身であることを思い合わせて読むべきであろう。

この他、ガ行を「半濁」と称するものは、川本 [1990] などの挙げるものの他に、

- 山田美妙『日本大辞書』明治 26 年「か」の条
- 大島正健「地方発音の変化及び其配布」『音韻漫録』明治 31 年
- 金井保三『日本俗語文典』明治 34 年⁷
- 山本笑月『謡曲座右抄』明治 43 年
- 磯西忠吉『国語学新論』昭和 13 年

にも見える。また、『音韻調査報告書』(明治 38 年)では、第二十条・廿一条で、「鼻音に発音することなきか」と「鼻音」という用語で質問しているのに対して、山形県が、最上郡で「総て半濁入鼻音的に発音す」と、「半濁」という言い方を使って回答している。

其門人なれば、其の人と、かきくけこの半濁の有無の争ひを為しし事ありて、それより後に、心を付けて見るに、紀州人、近江人などは、此半濁を遣ふなれば、まづ近江、紀伊以東以西に分かれて、国中半々の形なれば、あながち無しと定むるは如何にぞや、また紛ること多きを如何にせん、そは我君と若君と、公家と公廩と、鍵と垣と、家具と角と、緒笥と桶など、数ふれば、いくらかも有るべけれども、あらましをいひぬ。」と続く

⁷川本 [1990] では「鼻音」を指摘するが、p8 に「半濁音」がある。

また、現在でもガ行鼻濁音のことを半濁音と称することがあるようである⁸。これについては、ガ行鼻濁音の表記にはパ行音の表記と同じ表記法、つまり半濁点をつかうためにこれをも半濁音と呼んだということも考えられる。

翻って考えれば、明治期のものも、半濁点表記からこれを半濁音と呼んだのではないか、という疑問も起こるであろうが、ガ行鼻濁音の表記法は、川本 [1990] も説くように、そう単純ではない。明治期には、パ行同様の表記よりも、点を一つ打つ『単語篇』式の表記の方が優勢であった⁹。この点を一つ打つ『単語篇』式の表記も、濁点の半分ということで「半濁点」と呼べるかもしれないが、パ行音に類推して半濁音と呼んだということにはあたるまい。

ガ行鼻濁音をどのように呼んできたか、ということについてはまだ考察が十分ではない。「鼻濁音」という言い方がいつ頃からあるのかについても調べねばならないし¹⁰、他にも、言い方がある。たとえば、土館長言 [1899] のように「次清音」などと呼んでいるものもある。川本 [1990] が指摘するようなパ行音を次清音と呼ぶこととの混乱があったのではないかとともに思うが詳しいことはわからない。

4 ラ行

ラ行音を半濁と呼んだのは、賀茂真淵である。『語意考』(明和六 1769 年)に、

五十聯音 いづものこゑと訓

阿伊宇延袁 本音

加幾久計己 清濁二音

佐志須世曾 同

多知門天登 同

奈仁奴禰乃 清音

波比不反保 清濁二音

麻美武米毛 清音

也伊由衣与 同¹¹

良利留例呂 半濁

⁸NHK アナウンサーの秋山士郎 [1984]p.70 など。また、遠藤邦基 [1974] は、音楽教育で「カとガの中間にくる」という教え方のあることについて言及している。

⁹常深千里 [1928] は、「鼻音のガ行は、やはり慣用を重く見てカ`キ`ク`ケ`コ`の方がよいと思ふ」としているし、神保格 [1936] は、「カ`キ`ク`ケ`コ`」を「筆者の新工夫の字」としているほどである

¹⁰私の調べでは上田萬年 [1895] ぐらいまでしか遡れていない。

¹¹川本 [1990] ではヤ行が脱落している。

和爲宇恵於 清音

とある。林圀雄『皇国の言霊』(文政八 1825 年)も、これに習っているし、川本 [1990] によれば、橋真一郎『絵入単語編』明治七年もラ行を半濁音にしている。

これも韻学の「半濁」に通じる。しかしこれが韻学の「半濁」であるのなら、マ行ナ行も半濁になっていそうなものである。たとえば、上田秋成『靈語通』では、

字音につきていはゞ、ナニヌネノ、マミムメモ、ラリルレロの三行は、四音の分なき半濁音の音ならずや。

としている。真淵はナ行マ行を清音としているが、これはどういうことであろうか。

実は韻学の方でも、マ行ナ行の「半濁」と他の「半濁」を区別することがある。例えば、岡玉摩『帰元韻鏡』(元禄十二 1699 年)では、マ行ナ行を「清濁」とするのに対し、ア行ヤ行ラ行ワ行を「不清不濁」とする。しかしなお、これとくらべてもア行ヤ行ワ行との違いが問題となる。

鈴木真喜男 [1975] の指摘にもあるように、『語意考』には、「清濁を通はしいふ例」として「我藝愚解暮と良利屢例漏と通ふ」がある。真淵はおそらくこの他にも、「語頭に立たない」など、濁音行とラ行とが通じる言語現象をも通してラ行を半濁と考えたものと思われるが、真淵はまた『続万葉論』では、八行転呼音を半濁と称しているのだから、韻学の「半濁」が真淵に影響を与えたことはあるであろうと考える。

5 八行半濁音

さて、太田全斎は、前掲のように、漢字音の半濁と倭半濁を混乱してはいけないと言ったのだが、半濁のみならず清濁においても、既に漢字音の清濁と、日本語の清濁とは別のものになっていて¹²、これを混乱すれば誤解を生み出すもとなる。日本語の清濁は、ハとバに代表されるように、無声と有声の対立ではなく、主に連濁で関連付けられる形態論的な対応になっていた。クサバナのバナのおけるバと、ハナにおけるハとの対応が清濁であるということである。それに加えて鈴木孝夫 [1962] が指摘したようなものも日本語の清濁に関わってくる¹³。

こうした形態論的な清濁と、音声学的な有声無声を混同してしまい、パ行音は無声音であるのだから半分たりとも「濁」でなどはありえないとしてしまったのが、上田萬年以後の「半濁音」不当説であるといえよう¹⁴。

¹² 鈴木豊 [1992] 参照。

¹³ また出雲朝子 [1993] のような擬声語擬態語も参照。

¹⁴ 実は、このような考え方は上田萬年以前からある。例えば鳥海松亭『音韻啓蒙』の「此の音

さて、パ行音を「半濁」と呼ぶのは、既に指摘されているように『補忘記』あたりからのようである¹⁵。『補忘記』では、清音に単圏を用い、濁音に双圏を用いるが、「半濁」については単圏を付した上で、双行注で「某字半濁」と注記する。したがって『補忘記』を見る限りは、「濁点の半分であるから半濁」とは言いにくい。表記上は清音と半濁音が同じであるからである。もちろん『補忘記』以前に p 音を「半濁」と呼ぶことはあったのであろう。その時点で、p 音に単圏を施し、清音には圏点を施さず、濁音には双圏を施す、ということが行われていたのであれば、濁点の付け方から「半濁」という言い方が出来た、と言う考えも首肯される。キリシタン版『落葉集』などは、濁点は双圏ではないが、それに近いものになっている。しかし、『落葉集』のように、p 音には必ず単圏を施して濁音とは区別し、しかも単圏を他の音を表すのには用いない、というのは沼本 [1990] でみても珍しいのである。

「半濁」という用語が表記から出来たか否かはさておき、なぜ p 音を表記するために「濁音符号を半分に変える」(『音声学大事典』の記述を借りれば)という方法を選んだのか、またそれで定着したのかということが問われなければなるまい。また、表記は不濁点や注意符号からの発展・独立であるにしても、それが「濁音符号の半分」と意識され、さらにそこから、音についても「清濁の間の音」(和字正濫鈔・漢字三音考)・「すむとにごるとのあいだ」(朝鮮物語)・「清と濁の間」(久留米浜荻)などというとらえられ方がなされるようになったのか、が問題となるであろう¹⁶。

また逆に、音に対する意識の方が表記に影響を与えた可能性もある。たとえば、濁音「もろにごり」に対して p 音を「かたにごり」と称して「`」を付す例が『仮名鑑』(寛永三 1626 年)に見えることが、坂梨隆三 [1987] によって報告されているが、「`」は不濁点や注意符号とは異なる形であり、むしろ音に対する意識が表記に影響した可能性もあるように思える¹⁷。

では、形態論的な清濁の立場からパ行の「半濁」をとらえるとうどうであろうか。

小松英雄 [1981] では、

(パ行音は)本来は、八行音とともに、パ行音に対する清音としての役割りを分担していたが、濁音が受け持つべき領域にまで部分的に手を広げてしまったために、性格づけが難しくなってきた

(パピペボ)を、古来、半濁と称す。今いかに聞くと、濁るとは、云ひがたき音也」など。なお上田萬年も上田 [1895] においては、清濁の「心理学上の観察」を述べている。

¹⁵ 『補忘記』の観応については、その韻学的素養がどのようなものなのか興味を持たれるが、観応と『韻鏡易解』の盛典の関係については中川芳雄 [1978] 参照。

¹⁶ 遠藤 [1978] も指摘するように、「半濁」は「清音に対立した概念ではなく、濁音とのかかわりから派生した語」であろう。

¹⁷ 「かたにごり」という言い方に通ずると思える「偏濁」が、『国音正誤』(寛政元 1789 年写、九州大学蔵)にみえる。

有俗曰偏濁者パピペボ即是、唇重清音也。非濁音。

わけである。半濁音という名称それ自体は、ある意味で、うってつけのようでもあるが、そこまで見通しての命名ではないし、むしろ、かえって誤解を招きやすい。

と記している。『日本語学キーワード事典』の「清濁」(川嶋秀之氏)は、

パ行音は八行音やバ行音と対になって、1つの対立項を形成する。パタパタとバタバタ、ポタポタとボタボタなど擬声語、擬態語においては濁音のバ行に対して清音の位置をしめ、また、清音の八行に対しては濁音の立ちえない促音の後で、「立腹」「出版」「発奮」など濁音と相補分布的に連濁的に振る舞うことがあり、半濁音の呼称もあながち不当とはいきれない。

と、小松 [1981] や先に引用した奥村先生のものと通じる考え方で半濁音の呼称を是認している。

実はこうした考えは江戸時代からあって、藤井常枝『和漢字名録』の、前掲箇所後に、

上に被る字音、跳仮名か詰仮名なる時は、下の字のハヒフヘホ自然と転じてパピブペポとなる。(中略)此を半清音と云ふ、清音にして全清の如く爽ならず、濁音に似て鼻に係ざるが故なり。音語和語共に、上に跳るか詰るの下にては、自然と半清音生ずれども、上の音便に因ずして故意に唱る音にはあらず。

とある。「半清音」という呼び方をしてはいるが、ほぼ同じ考え方と言えそうである。

さて、金田一春彦氏は、『日本古典文学大系 33 平家物語・下』(1960.11.5 岩波書店)の「平家読み方一覧」(p484)において、

げんべい【源平】〔口〕Guem,Pei,Tô,Quit 八行音が連濁によって半濁音になるのは、語と語の結びつきが、濁音になる場合よりゆるやかであると考えられる。〔口〕の表記は、そのことを暗示する。

と、『ロドリゲス大文典』のローマ字表記と区切り符号を元に記している。金田一春彦『新明解古語辞典 補注版』(1974.6.1 三省堂)の「源平藤橘」にも同趣旨のことが見られる。これは、「半濁」という意味を直接には説明していないが、語の結び付きにおいて、

清音 < 半濁音 < 濁音

となる、ということを示しているように見える。これによれば、まさに、清音と濁音の半ばに位置しているのが半濁音ということになる。

しかしこの例だけでは証拠として弱すぎる。この傾向は一般的に言えることなのであろうか。また、ヤマカハとヤマガハの例から、連濁しない並立は

結合度が低い、といわれて来たが、並立するのが、結び付きが弱い、と言い切れるのであろうか、という疑問もある（高山 [1992] 参照）。

そこで、八行バ行バ行の関係を『日葡辞書』で見ることにする。擬声語擬態語と外来語以外で、p音が現われる環境は撥音の後と促音の後である。促音の後にはb音は来ないし、f音も来にくい。そこで撥音の後の出現状況を見る。

二字漢語は例が多く、また分析が困難である。ただ、当時はb音で発音されていたもので、後にp音で発音されるようになったものも多い¹⁸という事実と、並立の場合にはp音になりやすい（「文武」がBunpuとなるなど）ことなどは先学の指摘するところである。

さて、三字以上の漢語と、混種語について見ることにする。現代語における場合を考えてみると、例えば「審判法」ということばの場合、これは「しんぱんほう」と読まれて「審判+法」と分かれ、「新領布」という場合には「しんはんぷ」と読まれ、「新+領布」と分かれる。つまり現代語の場合には、八行音であることが、バ行音である場合よりも前項との結び付きの弱いことを示すのである¹⁹。

さて、『日葡辞書』の時代にはどうであったろうか。項目語のうち、撥音の後にbかpが来ているもので、語頭では濁音にならないもの、つまり連濁であると見なされるものを抜き出した。まず、撥音+pを示す。

birampū, びらんぷう, 毘嵐+風

botanpi, ぼたんぴ, 牡丹+皮

fenpoccai, へんぼっかい, 遍+法界

fonpuxō, ほんぷしょう, 本+不生,

ixxinpuran, いっしんぷらん, 一心+不乱 (ixxinpuran, いっしんぷらん, 一心+不乱)

ixxinpuranni, いっしんぷらんに, 一心+不乱

jinpuxō, じんぷしょう, 仁+不肖

qenpuxō, けんぷしょう, 賢+不肖

sanpiōxi, さんびょうし, 三+拍子

sanpugiō, さんぷぢょう, 三+不調

vonpacaxe, をんぱかせ, 御+帯刀

finpotdō, ひんぼつだう, 乗払+堂

¹⁸ 『日葡辞書』でb音であるもののうち、『和英語林集成』初版でp音になっているものは、「珍宝/根本/伝法/田夫/偏頗/銀箔/憲法/金箔/寸白/信服」、更に第三版でp音となっているものは「南方/痲癩/閩白」がある。また現代語では更に「元服/人夫」がp音である。

¹⁹ McCawley[1968]、早田[1975]、迫野[1989]参照。

sanpitcaiqen, さんびつかいけん, 山筆+海硯

qinpenxu, きんぺんしゅ, 近辺+衆

ninpinin, にんぴにん, 人非人(?)

qenpiyxi, けんびいし, 檢非違使(?) (qenbiyxi, けんびいし, 檢非違使)

これらの多くは、現代語において同じような語構成であれば、半濁音ではなくて清音が来そうなところである。「毘嵐+風」「牡丹+皮」「遍+法界」「本+不生」「仁+不肖」「賢+不肖」「三+不調」「御+帶刀」「一心+不乱」など、切目の後に八行音が来るものがそうである。「賢不肖」などは「けんふしょう」と読まれているし、また例えば現代語で「+風」「+皮」という語であれば八行音が来るところである。なお、「三拍子」は現代語においては濁音となるが、これは、「手拍子」など、前に撥音が来なくとも濁音となるものなので、性質が異なりそうである²⁰。

「檢非違使」は語構成が分かりにくいだが、語形もそれを反映してかpとbの両方がある。「人非人」も語構成が分かりにくい、「人+非人」であろうか(なお、『日葡辞書』に載せているヒニンは「貧人 Madoxij fito」である)。

「一心不乱」は、pとfの両形があるが、『日葡辞書』の項目語においては、撥音の後にfが来ることは大変少ない。これまでに見出したのは以下の例のみである。

coxen föxen こせんはうせん 故戦防戦

ixxinpuran. l, ixxinpuran. いっしんぷらん または いっしんぷらん, 一心不乱

qendon föit. けんどんほういつ 慳貪放逸

socusan fengi. そくさんへんぢ 粟散辺地

quanfi くわんひ 歡悲 (補遺)

xinföracu しんほうらく 神法楽 (補遺)

xixinfocqet. ししんほっけつ 紫宸北闕 (補遺)

また、『邦訳日葡辞書』では、

bin fima びんひま 便隙

libun fazzure. じぶんはづれ 時分外れ

という参照項目を立てているが、便隙はVcagaiの用例中に「bin fima uo vcagö」と見えるもので、項目語としてはbimpima(ママ)である。

²⁰高山倫明 [1993] など参照。

これら撥音の後に f が来るものは、例えば、『天草本平家物語』で、「von feñji」(23-14)、「Fôguen feñji」(37-22)などと、また『天草本伊曾保物語』で、「nisannin fodo」(411-11)、「qendon föit」(438-06)などと、スペースを空けてあるような、語としては熟していないものであろう。『日葡辞書』の「故戦防戦」「慳貪放逸」「粟散辺地」も、n と f の間が開けてある²¹。「時分外れ」は「時分」の中に見えるもので、n と f の間が開けてある。

小倉肇 [1990] は、迫野虔徳 [1989] を評して、

「通常の漢語形では撥音の後には八行音（子音）は来ない」のは、p 音が b 音（連濁形）とともに に対して複合表示機能を果たしているから、

としたが、キリシタンのローマ字本の、n と f の間の空け方は、撥音の後に が来ている場合、複合していないと意識されていたであろうことを示していると言えよう。

さて、形態素の切れ目ではなく内部であるのに p 音で現われるのは、「乗弘+堂」「山筆+海硯」「近辺+衆」の三つである。これは、下に掲げる撥音 + b と比較して少ないようである。

buqenbô, ぶけんぼう, 無+憲法
qinbucurin, きんぶくりん, 金覆+輪,
sanbôjen, さんぼうぜん, 三峰+膳
sanboncufai, さんぼんくはい, 三品+九輩
sanbuichi, さんぶいち, 三分+一
xenbenjuzu, せんべんじゅず, 千遍+数珠
yenbudagon, えんぶだごん, 閻浮+檀金
yenbudai, えんぶだい, 閻浮+提

このように、3 字以上の漢語の、内側にくるものを比較した場合、b で現われるものが p で現われるものよりも数が多いのである。これは単純な二字漢語での現われ方と比較すると大きな違いを示す。

二字漢語において撥音の後に p 音 b 音が来るものの内、複合しない場合には f 音であるもの（b 音でないもの）の数を調べてみると、撥音 + b が 60 語、撥音 + p が 154 語であり、p 音が b 音の約 2.5 倍である。ところがこれが、三字以上の漢語の中での現われ方では、p と b の比率が全く逆転してしまい、b が多くなるのである。

これは、複合語中に古態を残すということによる面もあるが、b と p との複合度の違いを示していると考えることが出来る。例えば、「三峰膳 sanbôjen」

²¹ 「歎悲」「神法楽」「紫宸北闕」は空けていないが、これらが補遺編に収められていることが関係するであろう。

は「千峰」が xenpô であることを考えると、sanpôjen であってもよさそうなのだが、そうっていないのは、「三+峰膳」ではなく「三峰+膳」であることを示していると考えるのである。

また、「山筆海硯」のような四字漢語の場合には、三字漢語の場合とは違いそうである。三字漢語の 1+2 あるいは 2+1 の切れ目よりも四字漢語の 2+2 の切れ目が大きいようである。『日葡辞書』でも 2+2 の切れ目では f となることが多く、p は「一心不乱」の 1 例である。その 1 例も f と p で揺れているのであるから、「山筆」が p 音であっても、それが複合度の弱さを示すことにはならないのである。四字の漢語に対し、三字漢語の 1+2 の場合は p が多く、f は「神法楽」の 1 例のみである。2+1 では p のみで f の例はない²²。

三字以上の漢語の切れ目には p が来ることが多いし、撥音 + b は、三字熟語を、1+2 あるいは 2+1 に分けた場合の 2 の中に入っていることが多いのだが、その例外となるのは、既に挙げた「検非違使」の他に次のものである。

chauanbachi, ちゃわんばち, 茶碗+鉢
cujigoxinbô, くじごしんぼう, 九字+(護身+法)
issunbôxi, いっすんぼうし, 一寸+法師
jenbaramit, ぜんばらみつ, 禅+波羅蜜
ranbiôxi, らんびょうし, 乱+拍子
tenbôrin, てんぼうりん, 転+法輪
xinbochi, しんぼち, 新+發意
xinbot-i, しんぼつ-い, 新+發意

これを見ると仏教語が多いようで、古形を残すことが多い仏教語であるために例外となっていると考えることが出来る。また、このうち、「茶碗+鉢」「一寸+法師」「乱+拍子」については、

suribachi, すりばち, 搦鉢
biua bôxi, びわぼうし, 琵琶+法師
xirabiôxi, しらびょうし, 白+拍子

という例からも分かるように、撥音の後ではないのに b になっている例があり(つまり連声濁ではない)、他の例とは違うと考えることも出来そうである。ただし、「三+拍子」のように「撥音 + p」になっているものもあり、なお考えねばならないところである。また「新發意」(xinbochi)は三字の漢語ではあるが、音形としては二字の漢語に近い(xinbot-i は知識的な語形であろう)。

²² また、現代語において、「小学校」は鼻濁音になるのに「高等学校」は鼻濁音にならない、ということも思い起こされる

これまで見て来たことによって、『日葡辞書』の時代には、複合度において、p音がf音とb音の半ばに位置する、ということが示せたのではないかと思う。このことが「半濁音」の名の由来であるということとはできないが、この名称が使われ続け、音として「清と濁の間」という認識をもたれることもあったことの理由の一端を示せたのではないかと思う。

以上、「半濁」という用語について、韻学における面と、現在普通にいうパ行の半濁についてそれぞれ考察した。

この他にも、大槻茂 『蘭学佩 [角雉] 附説』文化七 1810 年の、

g は「へ」喉音半濁と「け」の半濁とを合呼して出すの音なり。
此音特に口授にあらざれば伝へがたし、姑く「げ」に通じ用て可なり。

とあるようなものや、観世清廉 [1903]p30 の、

奥州人及越後の人。是れは（中略）ダヂツデドと云ふ濁音を強く濁りまして半濁にすることが出来ません。此の半濁の出来がたいのは九州の人も同じ塩梅でして、謡曲について最も必要な発音の働きを妨げられるのは困ります。

というような、どのような音を指しているのかが分かりづらいものもある。
川本 [1990] が指摘するパ行音を次清音と呼ぶことは、韻学によるものだが、これに関しては、別に触れる機会を持ちたいと思っている。

参考文献

- [秋山士郎 1984] 『ことばの散歩道』大和山出版社
- [出雲朝子 1993] 擬態語・擬音語の変遷 『言語』22-2
- [岩淵悦太郎 1944] 謡曲発音資料としての謳曲英華抄 『国語学論集』岩波書店（『国語史論集』1977 筑摩書房）
- [上田萬年 1895] 「清濁音」『帝国文学』1-6,9（『国語のため再版』1897 所収）
- [上田萬年 1898] 「p音考」『帝国文学』4-1（『国語のため第二』1903 には「明治三十三年一月稿」とあるが、明治 31 年 1 月刊）
- [遠藤邦基 1978] 中世末期のパ行音 その成立の背景 『講座日本語・日本文学 3』

- [遠藤邦基 1974] 「類音としてみたる清・濁の関係 掛け詞を手がかりにして」『王朝』7
- [岡島昭浩 (未刊)] 江戸期韻学における『音韻日月燈』(『中国近世の音韻学』京都大学人文科学研究所に投稿)
- [小倉肇 1990] 展望 音韻(史的研究)『国語学』161
- [川本栄一郎 1972] 幕末の『獄中記』に見られるズーズー弁とガ行鼻濁音『国語学』91
- [川本栄一郎 1990] 幕末の『獄中記』に見られるガ行鼻濁音表記とその系譜『国語論究2』明治書院
- [観世清廉 1903] 発音の話『能楽』18(池内信嘉編「謡の栞」『能楽』5-7、明治40 p32にも引く。正田梅香『謡と能の手ほどき』昭和10 玄洋社 p94にも引く)
- [菊沢季生 1935] 『国語音韻論』賢文館
- [小松英雄 1970] 不濁点『国語学』80
- [小松英雄 1981] 『日本語の音韻』中央公論社
- [坂梨隆三 1982] 浄瑠璃本の半濁音符『東京大学人文科学科紀要』74
- [坂梨隆三 1987] 『江戸時代の国語 上方語』東京堂出版
- [佐藤寛 1903] 本朝四声考『国文論纂』国学院
- [迫野虔徳 1989] 撥音の後のパ行音『奥村三雄教授退官記念/国語学論叢』
- [神保格 1936] 『国語音声学入門』刀江書院(『標準語音声学入門』1948 東亜出版も同内容)
- [鈴木孝夫 1962] 音韻交替と意義分化の関係について 所謂清濁音の対立を中心として『言語研究』42(『鈴木孝夫言語文化学ノート』1998 大修館書店所収)
- [鈴木真喜男 1975] 『単語篇』に児童がつけたふりがなについて『松村明教授還暦記念/国語学と国語史』
- [鈴木豊 1992] 術語としての「清音」と「濁音」『文京女子短期大学英語英文学科紀要』25
- [惣郷正明 1983] 鼻濁音の表記『言語生活』373,374(『日本語開化物語』1988 朝日選書)

- [高山倫明 1992] 清濁小考 『日本語論究』 2 和泉書院
- [高山倫明 1993] 連濁と連声濁 『訓点語と訓点資料』 88
- [土館長言 1899] 続江戸詞 『同方会誌』 22 (芳賀登編 『町人文化百科論集 3 江戸のうつりかわり』 柏書房 1981 による)
- [常深千里 1928] アクセントと ng 音の表記法 『音声学協会会報』 10
- [中川芳雄 1978] 連濁涵精 『国語国文』 47-2,3
- [沼本克明 1990] 半濁音符史上に於ける唐音資料の位置 『国語学』 162(沼本 1997)
- [沼本克明 1991] 日本語の表記記号の展開 中世以後の圈点「°」 『広島大学教育学部日本語学科紀要』 1 (沼本 1997)
- [沼本克明 1997] 『日本漢字音の歴史的研究 体系と表記をめぐって』 汲古書院
- [早田輝洋 1975] 放送での発音とアクセント 『放送用語論』 日本放送出版協会
- [肥爪周二 1997a] 悉曇学者行智の江戸語音声観察 『明海日本語』 3
- [肥爪周二 1997b] 行智の悉曇学とその発達段階 『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』 30
- [深井一郎 1972] 半濁音符小考 『金沢大学教育学部紀要』 21
- [山田忠雄 1981] 『近代国語辞書の歩み』 三省堂
- [McCawley1968] McCawley, James D. *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. MOUTON

引用文献

- 鳥海松亭 『音韻啓蒙』 九州大学附属図書館
- 藤井常枝 『和漢字名録』 九州大学附属図書館
- 太田全斎 『音図口義』 浜野知三郎編 『漢吳音図』 六合館 1915
- 伊藤多羅 『音韻新書』 国立国会図書館
- 泰山蔚 『音韻断』 学習院大学附属図書館(国文学研究資料館マイクロフィルム)
- 池田柳絮 『韻学口訣』 国立国会図書館
- 竹下朋繩 『音韻指掌図』 岡島蔵本
- 靈苗天産 『声音対』 東北大学附属図書館

文雄『磨光韻鏡』 勉誠社文庫 90
文雄『韻鏡指要録』 勉誠社文庫 91
富士谷御杖『北辺随筆』 『日本随筆大成』新 1-15
上田秋成『靈語通』 『上田秋成全集』第六卷
本居宣長・上田秋成『呵刈葎』 『本居宣長全集』第八卷
三浦道斎『韻学筌蹄』 岡島蔵本
林圀雄『皇国の言霊』 マイクロフィルム版『静嘉堂文庫所蔵 国語学資料集成』
岡玉摩『帰元韻鏡』 大谷大学
呂維祺『音韻日月燈』 国会図書館

引用に際しては、濁点・句読点などを補い、読みやすいように平仮名片仮名を改めた部分がある。【】は双行注である。

なお、本論文は、平成8年度春季福井大学国語学会(1996.6.8)、ならびに第16回中部日本・日本語研究会(1997.5.10)において発表したものを発展させたものです。ご教示賜りまして有り難うございました。ご教示を十分に生かしきれずに申し訳なく存じます。

山田健三氏作成の『日葡辞書』見出し語電子データを利用させて頂いたことにより、『日葡辞書』の用例を補うことが出来ました。記して感謝いたします。